



# social business

ソーシャルビジネス研究会ケースレポートNo.5

魅力ある源流物語の創造・源流資源の循環・源流ビジネス展開へ  
＝源流の価値化と可能性探求し源流ネットの形成・源流研究所の挑戦＝

2009年3月

中村文明 多摩川源流研究所所長・NPO法人全国源流ネットワーク代表

## はじめに

みなさんは、「源流」という言葉を聞いて、どんな世界を想像しますか。深山幽谷の大自然をイメージする人もいるでしょう。あるいは、川の流域の中であって、上流の行き止まりで何か遠い存在の場所を思い浮かべた方もいるでしょう。ところが、源流は、水や川の源であるばかりか、日本文化の大元・源でもあったのです。

日本の歴史を辿ると日本人は森や山とともに暮らし、田畑で生産されるもの以外は、すべて自然に生かされてきたという事実を知っていますか。トチやクリ、クルミなどの食料、焼き畑のキビやヒエ、家を建てる木材、薪や炭などの燃料、イラクサやシナ、ゼンマイからとれる繊維、食料や薬として利用する植物や動物達。などなど人間の命や暮らしは、すべてが自然に支えられていました。こうした中で、日本人は、世界のどの国よりも優れた自然と共に生きる生き方や独特な思想・自然観を創造してきました。

こうした誇るべき日本の源流文化に注目し、源流域の厳しい環境の中であって、源流の価値化による魅力ある源流物語の創造や源流資源の循環・活用を図り、源流ビジネスに挑戦し、源流元気再生に取り組んでいるのが、山梨県小菅村と多摩川源流研究所です。

今何故源流に新しい光が差し始めたのか、どこに源流の魅力があるのか、どんな源流物語が生まれているのか、源流ビジネスの可能性について、共に考えてみましょう。



## 源流の輝きに触れ、源流人生へ衝撃的転換

私が、多摩川源流の谷に最初に入ったのは、1994年7月18日、午前10時のことである。何故この日のことが忘れられないかと言えば、この日から自分の人生が大転換したからである。この日の源流との出会いは、あまりにも衝撃的であった。谷を遡り始めたら、大きな朽ちた枯木が谷を跨ぐようにして横たわっていた。何年の時が流れたのであろうか、青々とした勢いのある苔が全体を覆っていた。その朽ちた木から若い樹木が元気にスクスクと育っていた。自然の生き物は自らの命を失ってもなお新しい生命を育んでいる。厳しい環境の中で、自然の摂理に則って生きている。力強く真っ直ぐに生きている。私は、呆然として、源流の輝くような命の前に立ち竦んでいた。

## 源流の流れは時代とともに価値を増していく

目の前の源流の清冽な流れは、時代とともにその価値や存在感を増していくだろう。そして、私は、自らの存在をかけて源流とともに生きていこう、私のすべてを源流に注ぎ込もうと心に誓った。

それは不思議な体験であった。目には見えない本当に大切なものが、心の鏡に映っていたのだろうか。何か源流に誘ったのだろうか。もしかしたら、源流の神々との出会いであったのかもしれない。この日から、源流の魅力に取りつかれその虜になり、明けても暮れても源流のことしか頭にないという私の源流人生が始まった。

## 滝の由来をひとつひとつ記憶にとどめた

最初に飛び込んだ谷は竜喰谷（りゅうばみだに）だった。源流の古人（いにしえびと）がどんな思いでこの谷にこの名前を名付けたのかが知りたかった。そこには、大小13の滝が連続した。最初が、出会い滝。精錬場の滝、ヤソウ小屋の滝、箱淵、下駄小屋の滝、無名滝、魚止めの滝と連続した。

源流に住む長老達は、源流への想いを私にぶつけてきた。長老いわく「精錬場の滝はこの滝の周辺に金山があり、金を精錬するのにこの滝を利用したことからこの名前が生まれた」と。ヤソウ小屋の滝は、まわりに天然のヒノキが育っていた。切り出すのにキヨリ達が泊まり込みで仕事に精を出した。この滝の肩に山小屋が建てられていたが、小屋の持ち主がヤソウ爺だった。滝の名前を辿ると、樵の名前に行き着いた。

### 誰も近寄らない途轍もなく深い谷底の中に入る

さらに、多摩川源流で一番恐れられている谷は、大常木谷である。地元の長老は「文明さん、あの谷には絶対一人で行くな。帰ってこれなくなる」と忠告する。大常木谷には絶対に行くなと言われてれば、覗いてみたくなるのが人情である。初めは、一人で谷の入り口を何度も往復した。最初の滝が「五間の滝」だ。一間が約二メートルなので、十メートルぐらいの落差のある滝にこの名前が付いていた。

その上流に途轍もなく深い谷底の中に、カタカナで「セングの滝」と記された滝があった。地元の平山肇さんの案内を頼りに実際に出かけてみたが、悪戦苦闘の末、ようやくその滝に辿り着く。塗炭の苦しみとでも言おうか。本当に千の苦しみを味わう滝、東京都水源林の管理のための地図に書かれた「千苦の滝」の漢字がぴったりというのが歩いたものの実感であった。

### 滝壺のない滝には「修羅を張る」

ところが、丹波山村の守岡只さんという古老が「文明さん、違うんだ、その滝に滝壺があったか」と聞いた。「いいえ、滝壺はなかった」と応えると、その古老は昔からの木材搬出の方法を語り始めた。昔、上流から木を流すのに、どこでも筏を組んで木材を下流へ流した。谷の狭いところは、「筒流し」と言って、1本1本流していく。水量が少ないところは、谷をせき止めて、水を満タンにして、堰きを壊すと、ドォーッと流れる。それを「鉄砲だし」と呼んだ。

険しい谷で一番困るのが滝だった。滝壺があれば、上から流せば大木がドボンと落ちて痛まないで浮き上がってくる。ところが、このセングの滝は落下点が岩盤だった。そういうときには「修羅を張る」と守岡さんは語気を強めた。「修羅」とは、丸太を組んで雨樋みたいなものをつくって材木を降ろす方法だ。

### 魅力ある源流物語が開始された

足場の悪い場所に修羅を張るには腕の利く業師、たくさんの工（タクミ）を必要とした。千人のタクミを必要としたから「千工の滝」と書くのだと教えられた。頭をトンカチでガンと殴られたような衝撃を受けた。

それにしてもなんと凄い山師達がいたことか。奥深い源流で大自然が200年も300年も掛けて育ててきた銘木を、価値あるまま下流の人に届けたいと奮闘した樵たちがいたのだ。話を聞いていけばいくほど、日本の「古人」が川の恵み、森の恵み、山の恵みに感謝しながら自然への愛着とか、尊敬、自然に対する畏敬の念を込めて源流を守り育ててきた姿が目に見えてきた。こうして新しい源流の正体が姿を現して魅力ある源流物語が開始された。

## 源流の価値を探求し源流文化の神髄に迫る

源流の谷や滝に名付けられた地名に、源流に生きる人々の思いや愛着が色濃く反映していた。大地に刻まれた地名は、太古の昔から生きてきた人間の生活と文化を託した歴史の証人であり、人類の優れた伝承だと思えてきた。源流の人目に付かない奥地で流れ続ける滝の名称の一つにも、先人たちの自然への思いが込められていた。人間の生活に必要な不可欠な水はすべて源流から流れ下っている。源流域は多様な野生生物の生息場所を提供するとともに、その変化に富んだ自然景観は私たちに安らぎと潤いを与えている。さらに、数千年にわたり日本人の暮らしを支え続け、見守り続けてきた全国各地の源流には、熊野、吉野、月山、白山、英彦山等に見られる修験道の信仰が生まれ引き継がれている。

## 日本古来の自然観を今こそ再発見し次の世代へ伝えたい

全国各地の源流に引き継がれてきた修験道とは「日本古来の山岳信仰に、神道や外来の仏教、道教、陰陽道などが混淆して成立した日本に固有の民族宗教」（田中利典）と言われており、山や森に代表される自然を崇め自然から学ぶ日本独特の自然信仰・原始宗教のことである。その起源は古く縄文時代に遡ると言われている。

狩猟採取時代の人々は、人間の支配が一方的に進めば、自らの生存の基盤を崩しかねないとの懸念と智慧を持ち合わせ、人間は自然の一員として有り続け、森羅万象、生きとし生けるものと共生する文化を育んだのであろう。その人間と自然が絶妙な関係を保つという日本固有の生き方が、最も色濃く引き継がれている地域が全国各地の源流にほかならない。



## 源流絵図の完成から源流研究所設立へ

源流域の淵や滝の名前は市販されている地図には殆ど載っていない。残っていたのは地元の70歳、80歳の長老の頭の中である。高齢化が進むなかこれは大変な事だ。今取り組まなければ、取り返しの付かないことになってしまうと。5年間で420回ほど源流に通い源流資源調査を行い、滝や淵の名前や由来を詳しく書き込んだ最初の「多摩川源流絵図」塩山版を1999年8月に作成した。

源流絵図は、新聞やテレビが次々と報道してくれた。山梨県河川課が印刷製本の費用を全額支援してくれたこともあって、99年に製本され源流絵図がいよいよ世間にデビューすることになった。

## 小菅村と運命的な出会いが待っていた

99年の暮れに小菅村を訪れ、源流絵図を届けた。源流絵図とはいえ、小菅村は載っていなかった。その場で小菅版もつくりますと約束して、源流絵図小菅版の作成に取りかかったのは、2000年3月12日。

源流絵図小菅版に向けての調査も順調に進んでいた6月のある日のこと。大雨が降り出し、調査活動を断念して教育委員会に挨拶に訪れた。降矢英昭教育長がおられ、源流絵図作成にかける想いを聞かせて欲しいとのことで、源流への想いを一気に2時間も続けた。途中、教育長は何度か退席された。源流物語に飽きられたのかと思ったら、一人で聞くのはもったいないと担当課長を呼びにいったと。このとき、降矢教育長は、何かを心で決められたようだった。「7月19日の学習会に関係者を集めるので、今日と同じことを話して欲しい」と依頼された。

小菅村は、7月19日の学習会を経て、8月上旬の庁議で源流研究所を設立することを決め、9月27日に「多摩川源流研究所設立準備室」（室長中村文明）を発足させ、2001年4月8日、多摩川源流研究所が設立された。

## 小菅の宝・「妙見五段の滝」との感動的な出会い

「源流絵図」小菅版作成で最も印象に残っていることは、五段の滝との出会いだった。この滝を発見したのは、2000年4月のこと。実踏調査の途中で五段に流れ下る見事な滝に遭遇した。その名前が知りたくて地元の高齢者60名に集まっていたいただいて、場所を説明し写真を見せたところ、誰も知らない。春から秋までその滝の名前を聞いて歩いたが、名前は出てこなかった。すると小菅村から中村所長に提案してほしいと要請があった。

### 存在感のある滝には、風格のある名が付いている

面白いことに700回以上、源流に足を踏み入れ淵や滝の名前を調べて歩いているうちに、滝の名前の付け方に、一つの方程式があると感じた。名前の付け方に三通りあった。一つ目は、谷の名前を滝に授ける。ある谷に見事な滝があるとその谷の名前をそのまま滝の名前に付けるやり方である。例えば、泉水谷なら泉水大滝というふうに。

二つ目は、谷を歩いていると突然、山の神、水の神でも棲んでいるのではと思わず手を合わせたいくなる、そんな神々しい滝に出会うことがある。こんな滝には不動滝の名前が付けれられている。山や水の守り神として崇めたのであろう。

三つ目は、川の源頭に位置する場所が由緒あるところは、その名前を使うやり方である。この五段の滝がある小菅川の場合、源頭は大菩薩嶺の妙見の頭（標高1975<sup>尺</sup>）である。ここには、「北斗妙見大菩薩」の碑が建っていて、大菩薩の名前の由来の一つにもなっている由緒ある地点だったので、この五段の滝に「妙見五段の滝」と名付け村に提案した。

### 流域との連携は、村の発展にとって戦略的な課題だ

源流研究所を設置した小菅村は、多摩川の源流に位置する。この源流の村がどのようにして流域に根を張り、存在感や知名度を高め流域との連携を深めていくか、これは小菅村の発展にとって戦略的な課題である。多摩川の歴史や文化、その特徴を知ることなしに、地域再生に関する正しい方針も課題もたてられないと言っても過言ではない。ここで多摩川の歴史を簡単に紹介する。

多摩川の運命が大きく変わるのは、1590年からである。小田原城で徳川家康は、豊臣秀吉から「三河から江戸に移れ」と命令を受ける。家康が江戸に入ってきた年が1590年。家康は何を始めたかという、城下町をつくるために飲料水を確保する事業に着手し、赤坂溜池山王や神田上水を開設した。

### 多摩川が江戸の水資源を支える川へ

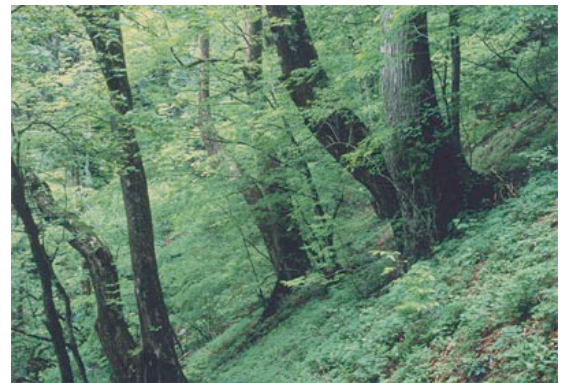
家康は13年後に江戸幕府を開いたが、江戸開幕によって、江戸は日本の政治・経済・文化の中心都市として成長を続けた。参勤交代が制度化されると江戸の人口は急激に膨れ上がり、それに伴って水の需要も一気に拡大した。そのため、江戸幕府は、多摩川を丸ごと上水へ利用するという大胆な発想の本に、玉川上水の開設に取りかかった。この玉川上水の開設こそが、江戸の庶民の暮らしを支え、武蔵野台地の新田開発の大きな原動力になった。まさに多摩川が江戸の発展を支える川へと大転換したのである。水を安定的に確保するには、源流の森が非常に重要だった。だから、源流域の森は大切され、多摩川の源流域をお止め山、つまり勝手に入って焼き畑をしてはいけない、許可なく木を伐ってはならないという山に変え保護していった。

### 明治34年に都水源林の経営が開始される

ところが、明治に入って、政府の森林政策が疎かになるとともに、源流域の森が乱伐をされ、荒廃し丸裸になっていった。明治の中頃には、ちょっと雨が降れば、玉川上水が濁る。日照りが続くと、水位が下がってくる、大変な事態を迎えた。そのため、東京府は明治33年に、東京帝国大学の本多静六博士を源流の森林の調査に派遣した。江戸時代に鬱蒼としていた山が、5,000畝も禿げ山になっていたことが判明した。

### 源流を軽んずると流域は源流に泣かされる

驚いた本多博士は、国土保全の上からも由々しい事態だということで、調査報告書をまとめた。源流の一带を東京府が管理しなさい、森を育てることによって安定した水源を確保しなさいと。報告を受けた東京市の尾崎行雄市長は、この重要性を認識して、「給水100年の計」という大方針を決意したわけである。



玉川上水の異変は源流を軽んずると流域は源流に泣かされるという教訓を示している。現在、東京都の

水道水源林は甲州市、丹波山村、小菅村の山梨県側と東京都奥多摩町の4市町村に広がり、その面積は21,635畝にも及ぶ。都水道局の優れた技術と管理によって全国屈指の水源林に成長している姿に尾崎行雄はきっと喜んでいることだろう。

### 資源の循環活用による源流ビジネスに挑戦

～「木づかい保健室プロジェクト」～

日本人は、薪や炭を燃料として重宝してきたが、昭和30年代にエネルギー革命が進行し、化石燃料にとって代わられたため、木質燃料が家庭から姿を消した。これと同時に開始された国によるスギやヒノキの拡大造林によって日本の森林面積の4割が人工林で占められるなど、森林の改変が進んだ。長期にわたる木材価格の低迷により、今、この人工林が管理されない深刻な危機に陥っている。森林は、針葉樹であれ、広葉樹であれ、水源涵養機能や災害防止など公益的機能を果たしており、この森林を負の遺産のまま放置してはならない。枝打ちや間伐など森林に手を入れて、間伐した木材を利用する仕組みづくりが大きな課題になっている。



### 木を伐り木を使い木を活かす

そこで、小菅村と源流研究所は、内閣府の支援を得て、2008年度、「木づかい保健室プロジェクト」に取り組んだ。まず、山を管理するためには、作業道が必要であり、崩れない安定した道をつくるため、大阪から大橋先生を招いて、鶴峠の村有林に大橋式作業道を開設した。作業道が作設されると誰でも簡単に車を使って山に入り、間伐作業や間伐した木材を搬出することが可能になった。この間伐材を製材加工して、小菅小学校の保健室のコンクリートの壁をヒノキの腰板で張り替えるというリフォームを行った。これが好評でマスコミでも大きく報道された。確かな手応えを感じて、この事業を流域に広めようと、小菅村と源流研究所は一体となって、流域の自治体へ営業活動に歩いた。狛江市、川崎市、大田区、稲城市、多摩市、昭島市などに足を運び、「木づかい保健室プロジェクト」への協力を要請した。源流ビジネスへの感触は良かった。幾つかの自治体で来年度モデル事業が開始されることになった。流域内での資源循環・源流ビジネスへの第一歩が始まった。



### 本物の大自然に立ち向かう源流体験

源流の素晴らしい自然を活用した源流ビジネスとして定着しているのが、親子で本物の大自然を体験できる源流体験教室である。源流と中流・下流との交流事業として、村の活性化に貢献している。昭和30年に2244名いた小菅村の人口は現在895名まで減少、これを増加に転じることは困難だが、交流人口を増やすことは可能だ。多摩川流域には、425万人の方が暮らしている。源流の魅力を発信して多くの心ある流域の市民に源流に足を運んでもらおう、そうすれば、滞在することで村に経済的な効果が波及する。

### ヒヤヒヤドキドキ・笑顔と感動の源流体験

どんな方法で源流体験教室を実施しているか。源流に来た親子や教師を前にして、中村所長がまず「今日は怪我をします。痛い目に遭います。転んだら自分で立ち上がりなさい。源流には道はありません。どの道を通るかは自分でよく観察して決めなさい。親も教師も今日は君たちをサポートしません。自分の安全は自分で守ること。人生で一番大切なこの原点をここで学びます」と宣言し、ヘルメットを着けさせ源流に入る。

非常に流れの速いところを渡るときには、子供たちも本当に真剣そのもの。岩をへつりながらわたる場所は上からロープが下がっている。私たちは「ヒヤヒヤドキドキコース」と呼んでいるが、ちょっと踏み誤ると、2メートルぐらいの深さの淵にドボンと落ちてしまう場所だ。体験の終わりは、飛び込みだ。水温は冷たいのに何回も何回も子供たちは飛び込みに挑戦する。心がしきりに動いている。体いっぱいの感動と笑顔、輝く瞳がそのことを教えてくれる。源流体験に2008年の夏は22団体、延べ1300名が参加した。



## 「環境学生」を育てる源流大学が開校

平成19年5月に小菅村に開校した源流大学（東京農業大学による現代GP事業）が注目されている。源流資源の価値化を進めるに当たって、専門的知見による分析・評価は欠かせないなか、源流大学の出現は大きな希望である。源流大学の目的は、①源流域に培われてきた伝統的な文化などを多くの学生に追体験する機会を与え次代の環境社会を担う「環境学生」を育成する。②源流大学の設置による交流人口の安定的確保を図り、源流域の活性化へ寄与することである。

## 学生達の笑い声が谷間にこだまする

開校以来、源流大学による森林体験、農業体験、景観体験、源流文化体験などの体験学習に参加した学生は、2500名にのぼり、その体験講座は65回に達しています。さらに研究室による調査活動も35回を数え150名の学生が自主的に源流を訪れ村内へ足跡を残すなど小菅村の活性化へ大きく貢献している。

とりわけ、私どもにとって嬉しいことは、村民49名が地元講師に名乗りを上げ、源流大学の体験講座の講師として活動を開始したこと。学生達と接することによって、源流の生活や暮らしの中で自らが身につけてきた知恵や技が学生の成長に役に立っていることに目覚め、村の高齢者が生き生きと暮らし始めたことだ。また、長作地区で35年振りに学生達が水田を復活したことは、長作地区の住民に大きな励ましを与えた。田んぼを提供した守重文俊さんは「放棄した田んぼが学生の活躍により見違えるように復活して嬉しい。でも、なによりも学生達の笑い声が谷間にこだますることが一番嬉しい」と学生達の姿が村民の心を温め励ましている。

## 流域をターゲットに源流ビジネスを展開する

源流域に新しい光を呼び込み、魅力的な源流物語の創造・源流資源の循環・活用による源流ビジネスを展開していく上で、最も大切なことのひとつが源流ネットワークの形成であろう。どんな商品も卸屋や市場を通して、或いはインターネット販売や産直を通して商店や直販という流通経路を通し各家庭へ届けられ、消費されている。現代社会の巨大な流通網相手に勝負を試みても所詮勝負は決まっている。源流ビジネスは、視点を変えて、日頃の繋がりを活かし、流域の共有財産を流域市民が日々の暮らしの中で活用することによって、その資金を源流の森林再生に役立てようというものである。

## 学識者、専門家、写真家など第一人者のネットワーク構築

源流研究所は、河川工学の第一人者である高橋裕先生や月尾嘉男先生、陣内秀夫先生、坂井秀夫先生、大橋慶三郎先生、鏝山英次先生、宮林茂幸先生、箕輪光博先生、中村幸人先生、神谷博先生、渋沢栄一氏、山道省三氏、鈴木真智子氏など様々な分野の著名人と信頼ある暖かい関係を築いてきている。皇居のカルガモの親子を世に出したことで有名な写真家の鏝山先生とは、源流の写真を通して親しくなり、全国各地の源流資源調査と一緒に出かけ、今では源流を守る同志である。こうした著名人との付き合いは、それぞれが知名度があり社会的に影響力を持ち合わせている方々であるだけに、小菅村や源流研究所の存在感を高める上で大きく貢献している。

## 源流から河口・海までのネットワーク

多摩川では、2004年に、源流から河口・海までを繋ぐ流域市民のネットワーク・多摩川流域ネットワーク（TBネット）が結成された。従前は、国土交通省の直轄区間を対象にした市民ネットワークが存在したが、県境の壁や縦割り行政の弊害を市民の力で乗り越えようと、市民が連携したのだ。源流から私中村がTBネットの副代表として参加している。また、源流域には、甲州市、丹波山村、小菅村、奥多摩町が加わる多摩川源流協議会があり、連携してシカの食害対策に協働で取り組んでいる。

## 全国の源流が連携して源流再生の大波を起こす

2005年11月には、河川の最上流に位置する自治体が国に働きかけて源流の郷と源流資源を守る施策を樹立させようと「全国源流の郷協議会」が結成された。この協議会には、五ヶ瀬川源流、耳川源流、旭川源流、紀ノ川源流、熊野川源流、木曾川源流、矢作川源流、千曲川源流、相模川源流、多摩川源流、利根川源流の町や村が加盟している。

また、市民レベルでは、2002年5月に源流を愛する仲間が集まって、全国源流ネットワークを結成し、源流の魅力と役割の大切さを流域全体へアピールしようと、全国源流シンポジウムを開催している。全国源流ネットは、05年2月にNPO法人の資格を取得した。2006年からは、全国源流ネットワークと「全国源流の郷協議会」が、協働で全国源流シンポジウムを開催し盛り上げている。

源流資源の循環・源流ビジネスの発展をとおして源流を守り源流の郷を元気な地域に再生しようというこのうねりは、必ずや全国的な大波となって、国民の共感と理解を広げ、誇りある源流を産み出していくものと確信している。

ソーシャルビジネス研究会レポート No.5

魅力ある源流物語の創造・源流資源の循環・源流ビジネス展開へ  
＝源流の価値化と可能性探求し源流ネットの形成・源流研究所の挑戦＝

著 者 : 中村文明

発行者 : 株式会社早稲田総研インターナショナル  
東京都新宿区馬場下町5番地 早稲田駅前ビル4階  
TEL : 03-5291-2130  
特定非営利活動法人エヌピーオー・フュージョン

発行日 : 2009年3月